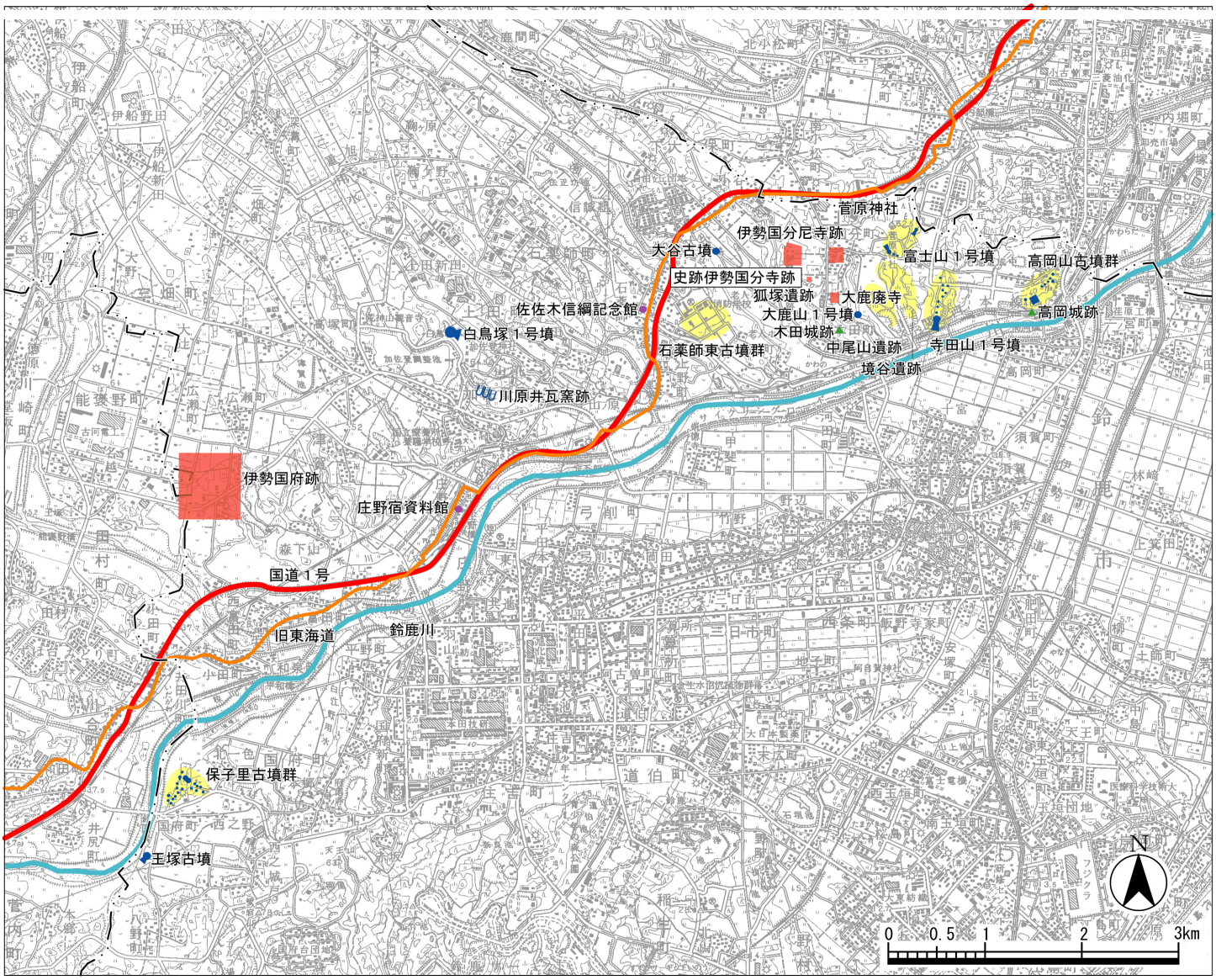
第２章　史跡伊勢国分寺跡の概要

(1) 史跡伊勢国分寺跡周辺の歴史的環境

史跡伊勢国分寺跡の位置する鈴鹿川流域は、県内屈指の遺跡の宝庫として知られ、特に伊勢国分寺跡のある中流域左岸の国分・高岡に集中している。史跡伊勢国分寺跡周辺は、早くから開け、先人が生活していたことが分かっており、なかでも弥生時代以降の遺跡が多く分布し、境谷遺跡や中尾山遺跡では弥生時代中期以降の竪穴住居、方形周溝墓等の遺構が確認されている。また、寺田山古墳群や富士山古墳群が鈴鹿川左岸丘陵部に築かれている。『日本書紀』敏達天皇四(575)年の条に記されている「采女伊勢大鹿首」は、国分町周辺を根拠地とする豪族であると考えられる。さらに歴史上名高い壬申の乱（672年）の主要な舞台として、鈴鹿郡家から三重郡家に至る間に大海人皇子一行が休息した「川曲の坂下」が、当地に残る字名や当地が往時の有力豪族大鹿氏の拠点と考えられる点等から、国分町の南、木田・山辺町周辺に比定されている。江戸時代の東海道が通る当地は、古代も東国と大和を結ぶ重要なルートであったと考えられている。また、史跡伊勢国分寺跡の東南、国分町南浦付近は国分寺が設置される以前の白鳳寺院（大鹿廃寺）が存在する。



鈴鹿川流域の文化財・文化施設

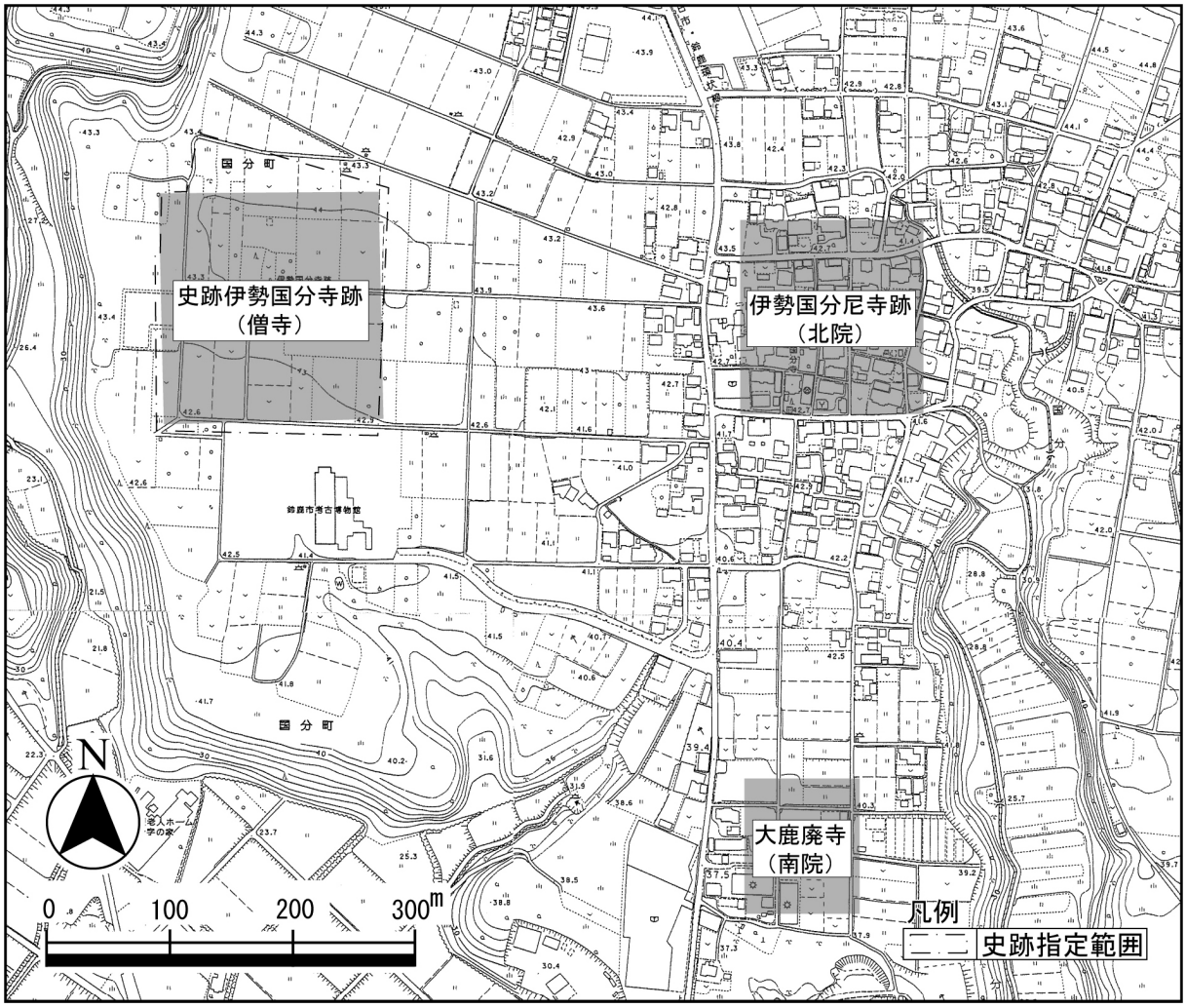
①　関連文化財等の動向

ア）国分尼寺（鈴鹿市国分町）

国分町光福寺に残る「伊勢国分寺陳跡碑記」の碑には、金光明寺（僧寺）を「南院」、法華寺（尼寺）を「北院」と称したとあり、南院は国分町南浦、北院は国分町の集落付近に比定され、いずれが尼寺であるか不明であった。両推定地は、住宅等の開発が進められ、遺構等の損傷が心配されていた。

こうした状況の中で、伊勢国分寺跡第４次調査から、尼寺跡の寺域確認を目的として、調査が行われることとなった。平成３年（1991）には南院を中心とした範囲で発掘調査を行った。その結果、多量の白鳳期の瓦を含む廃棄土坑を発見したため、白鳳時代の寺院が存在していたことが判明し、尼寺とは異なる大鹿氏の氏寺（大鹿廃寺）と考えられるようになった。

伊勢国分寺跡第６次調査（1993）では、北院に当たる最も集落に近い調査区で、僧寺と異なる奈良時代の鬼瓦、軒瓦を伴う大規模な瓦溜まりを検出し、ここが伊勢国分尼寺跡の可能性が高まった。第８次調査（1994）では集落の北に接する箇所に調査区を設け、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦、鬼瓦等が出土し、区画溝や柵を検出した。以上のことから北院と呼ばれる区域が尼寺と考えられるようになった。しかし、寺域の確認には至っておらず、今後の発掘調査が期待されている。



国分尼寺推定位置図

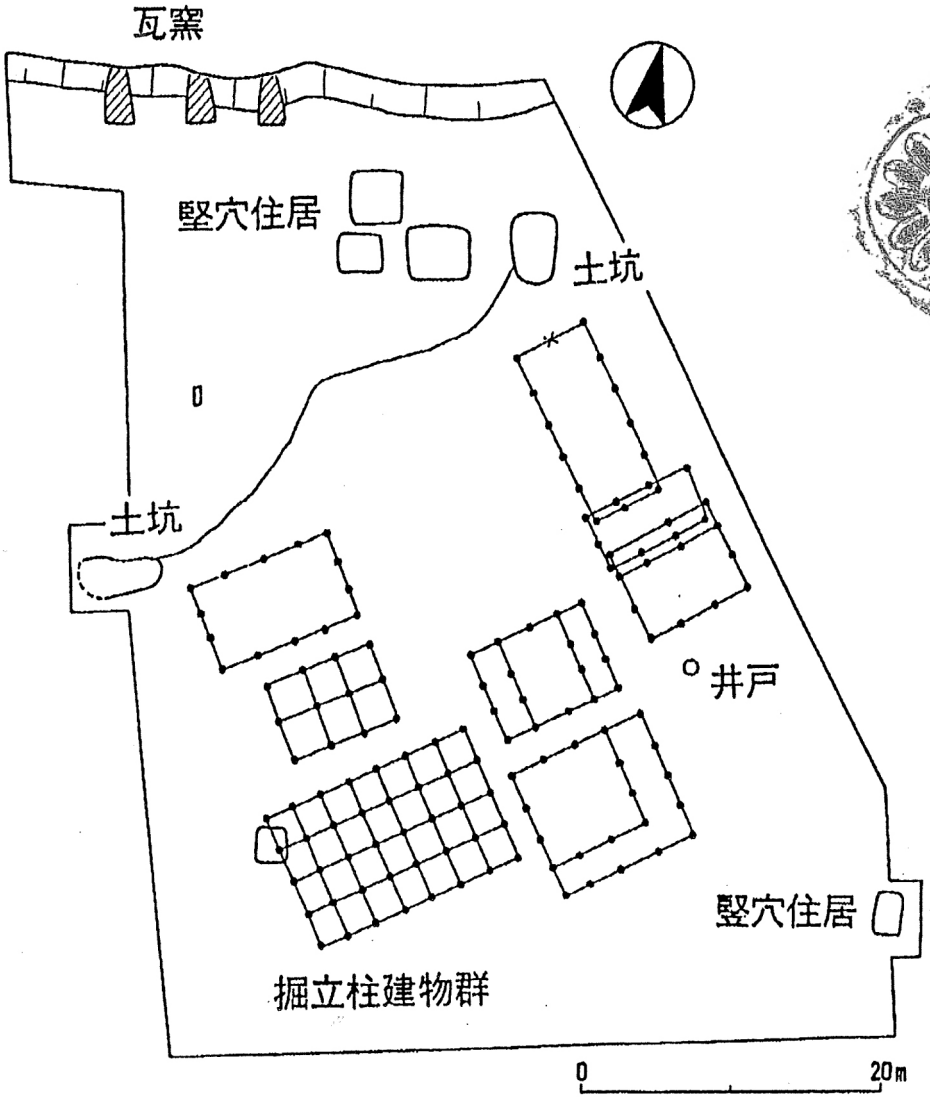
イ）川原井瓦窯跡（鈴鹿市加佐登町）

川原井瓦窯跡は、加佐登神社の南を流れる鈴鹿川支流の椎山川右岸段丘上に立地し、断崖を利用した３基の窯から構成されていることが、昭和52年度の調査で明らかになっている。これらは地下式のロストル式平窯といわれる形態で、平城京造営のころに導入された後、やや遅れて地方へ伝わったものである。各地でほぼ一斉に始まる国分寺の造営が、この窯の伝播を促進させたものと考えられている。

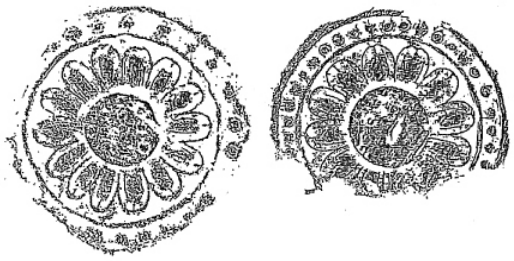
また、昭和53年度から54年度にかけての調査で、窯の南側に広がる平地には工房跡と考えられる竪穴住居３棟の他、瓦の貯蔵施設数箇所と平安時代初めごろの掘立柱建物８棟が見つかっている。

操業は奈良時代中ごろであるが、この窯で生産された軒瓦は伊勢国分尼寺跡以外では報告されていないため、伊勢国分尼寺造営のためだけの窯であったと思われる。

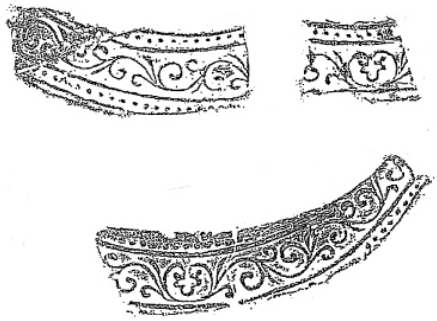
瓦窯から伊勢国分尼寺への瓦の運搬は鈴鹿川の水運を利用したものと考えられている。



川原井瓦窯跡遺構略図



軒丸瓦

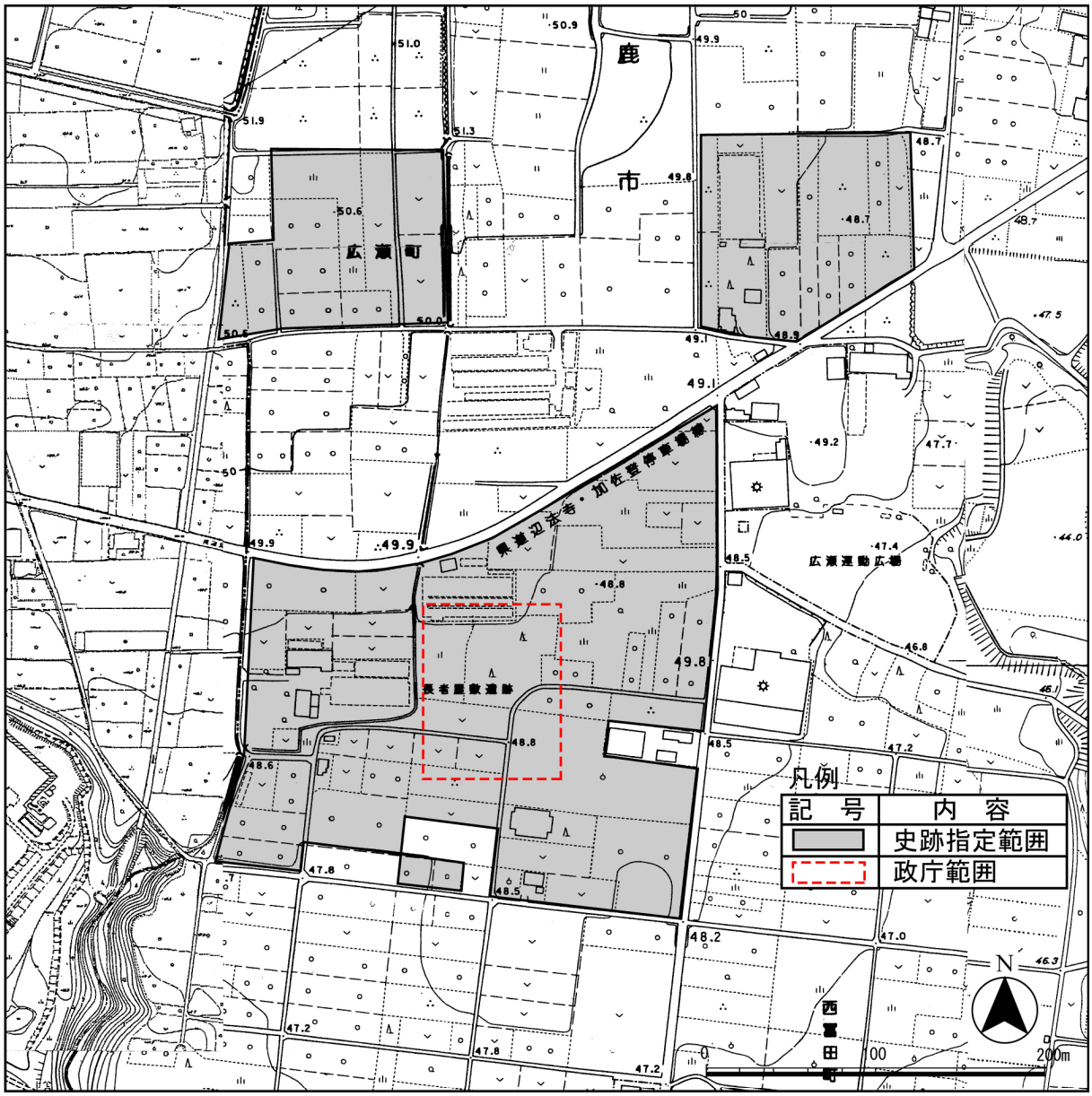


軒平瓦

出土瓦拓本

ウ）史跡伊勢国府跡（鈴鹿市広瀬町）

国分寺と最も関連の深い伊勢国府跡は、国分寺跡から西に７㎞に位置する長者屋敷遺跡であることが確認されている。平成４年度からの調査により政庁遺構や大型瓦葺礎石建物群が検出され、奈良時代中ごろから後半の伊勢国府跡であることが明らかとなった。政庁は基壇が良好な形で残っており、また、政庁の北方では方格地割が確認されるなど国府の全容がわかる全国的にも非常に貴重な遺跡であることから、平成14年３月19日には主要な３地点約74,000㎡が国史跡に指定された。ただし、この国府は奈良時代末から平安時代初頭には廃絶したとみられ、流用瓦が伊勢国分寺跡から出土している。廃絶後、国府は鈴鹿川の対岸に地名として残る国府町に移転したと考えられている。国府町の三宅神社遺跡周辺では奈良時代後半から平安時代にかけての大型掘立柱建物等の遺構が確認されているが実態はまだ明らかでなく、今後の発掘調査が期待されている。



史跡伊勢国府跡位置図

エ）鈴鹿市考古博物館（鈴鹿市国分町）

鈴鹿市考古博物館は市内の発掘調査・研究・展示の場として平成10年10月に開館した施設である。伊勢国分寺跡の南側に隣接し、史跡のガイダンス施設の機能も兼ねている。各部門ごとの面積は展示部門619.55㎡、普及部門286.08㎡、収蔵部門361.48㎡、研究・管理部門1,364.14㎡の計2,631.25㎡となっている。また、３階には伊勢国分寺跡を一望できる展望デッキが設置されている。主な展示内容は市内の遺跡からの出土品をはじめ、奈良時代の寺院や役所に関する特色ある資料を中心としており、特別展や企画展を行っている。年間を通して勾玉作りや土笛作り等の体験学習や火おこし体験、縄文の編み物等の夏休み子ども体験博物館といった子ども向けの催しと、古代の寺と役所を考えるシリーズの博物館講座、ガラス玉作り等の大人向けの体験講座が行われており、年間では約１万人の来館者数となっている。(資料(5)参照)

鈴鹿市考古博物館の外観

鈴鹿市考古博物館平面図

②　鈴鹿川流域の文化財等

これまでに関連する文化財を挙げたが、このほかにも、史跡伊勢国分寺跡から史跡伊勢国府跡にかけての鈴鹿川流域には多くの文化財や文化施設が所在する。

このことは鈴鹿川流域が古くから綿々と人々の生活の場であり続け､時には歴史の主要な舞台、政治、文化の中心地となった歴史的に重要な地であることを示している。

鈴鹿川流域の文化財等

名　称	概　　要
大鹿山１号墳	直径35m、高さ5.5mと比較的規模の大きな円墳である。
狐塚遺跡	古代河曲郡の郡役所（郡衙）に付随する正倉跡と考えられる。
大谷古墳	全長43m、高さ5.3mの前方後円墳であったといわれているが、現在は墳丘が大きく破損している。
寺田山古墳群	丘陵の先端に位置する１号墳は全長80mの前方後円墳で市内最大級。
富士山１号墳	全長50mの前方後円墳で、周溝と墳丘が良好に残る。
菅原神社	県指定彫刻の木造天神坐像がある。梅の名所としても有名。
高岡城跡	中世山城。尾根に深さ４m、幅４m、長さ50mの空堀を設けて守りを固めている。周辺には高岡山古墳群がある。
史跡白鳥塚１号墳	全長89.5mの帆立貝式の古墳。ヤマトタケルの墓といわれ、その霊が白鳥となって飛び去ったという伝説が残されている。県指定史跡である。
史跡王塚古墳	全長63mの前方後円墳。陪塚１基を含めて昭和45年５月に国史跡に指定された。
保子里古墳群	１号墳は双円墳とも全長50mの前方後円墳ともいわれる。明治32年の調査で黄金の垂飾付耳飾りが出土。周辺には10基あまりの古墳が分布している。
旧東海道	東海道44、45番目の宿場町であった石薬師宿と庄野宿がある。また伊勢国分寺跡の周辺には、ヤマトタケル伝説の残る杖衝坂（四日市市）がある。
佐佐木信綱記念館	歌人であり、国文学者として有名な佐佐木信綱は、鈴鹿市が生んだ偉人である。佐佐木信綱記念館は、信綱の著作や遺品を展示する資料館・生家・蔵・文庫がある。
庄野宿資料館	庄野宿資料館は、庄野宿に残る宿場関係資料の活用と市指定建造物である旧小林家を保存するため、主屋の一部を創建当時の姿に復元し開館した。館内には、庄野宿の本陣・脇本陣文書、宿駅関係資料や地域に残る民具、農具、日用品等を展示している。

狐塚遺跡

富士山１号墳

高岡城跡

(2) 景観

鈴鹿川と国道１号に囲まれる鈴鹿市北東部は、台地上に集落、農地等が立地し、所々に谷沿いの河畔林や高岡山のような独立峰が点在するのどかな田園風景が広がっている。この中で、東部では住宅開発が進み計画的な町並みが形成されている。背後の高岡山はランドマークとなっているとともに、周辺への展望が開ける眺望点でもある。

史跡伊勢国分寺跡周辺は、ほぼ平坦な台地状の地形を農地として利用しているため、比較的広い範囲を見渡せるという景観的な特徴を持つ。

台地の西側及び南側には河畔林が連続しており、これらの樹林帯が視野を遮断するため、指定地から西側への遠望は難しく、閉鎖された印象を持つ空間となっているが、一方でこれらの樹林帯は視覚的にまとまりのある空間としてとらえることもできる。しかし、指定地西側を南北に貫く形で北勢バイパスが計画されており、今後景観上の問題が出てくることが懸念される。

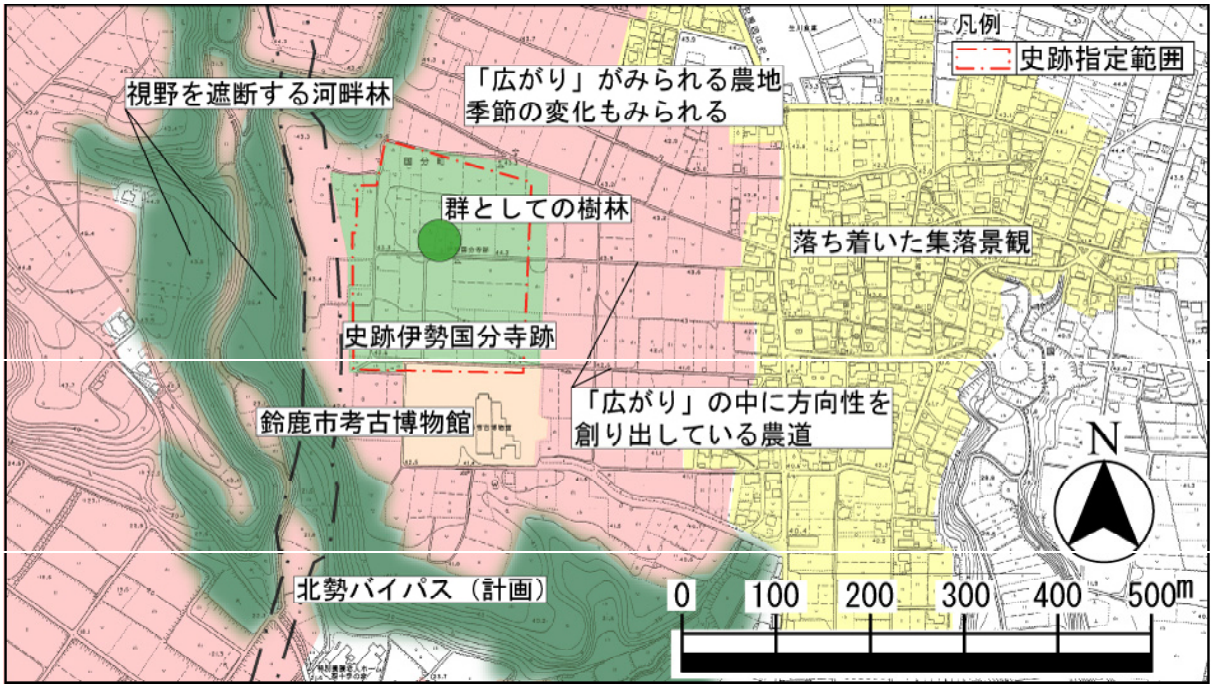
指定地から東側へ目を向けると、果樹等の樹木越しに連続する国分町の集落景観が遠望できる。背景には樹林が広がり、スカイラインもほぼそろっていることから、落ち着いた景観が形成されている。

北側は、樹木に遮られながら、断続的に建物が見られるものの景観的には強いインパクトはなく、農地の延長としての景観が広がる。

南側には平成10年に開館した鈴鹿市考古博物館とその広場が間近に迫り、景観にアクセントを与えるほか、地域ランドマークとしての役割も果たしている。

史跡地内を縦断する農道は、平坦な広がりの中に方向性を持つ遠近感のある景観を創りだしている。

指定地内においては、講堂の一部で基壇跡と考えられる土壇状の高まりが残り付近にいくつかの礎石と考えられる石のほか、瓦片等が散在しているのが見られる。この一角は、石碑やわずかな樹木により周辺と異なる景観を形成しており、単調な草地の中にアイストップを与える景観要素にもなっている。



景観構成図

史跡伊勢国分寺跡中央から東側を望む

史跡伊勢国分寺跡中央から西側を望む

史跡伊勢国分寺跡中央から北側を望む

史跡伊勢国分寺跡中央から南側を望む

鈴鹿市考古博物館前から史跡伊勢国分寺跡を望む

大正12年建立の標柱

昭和45年建立の標柱と案内板

鈴鹿市考古博物館３階から史跡伊勢国分寺跡を望む

鈴鹿市考古博物館西側の草地

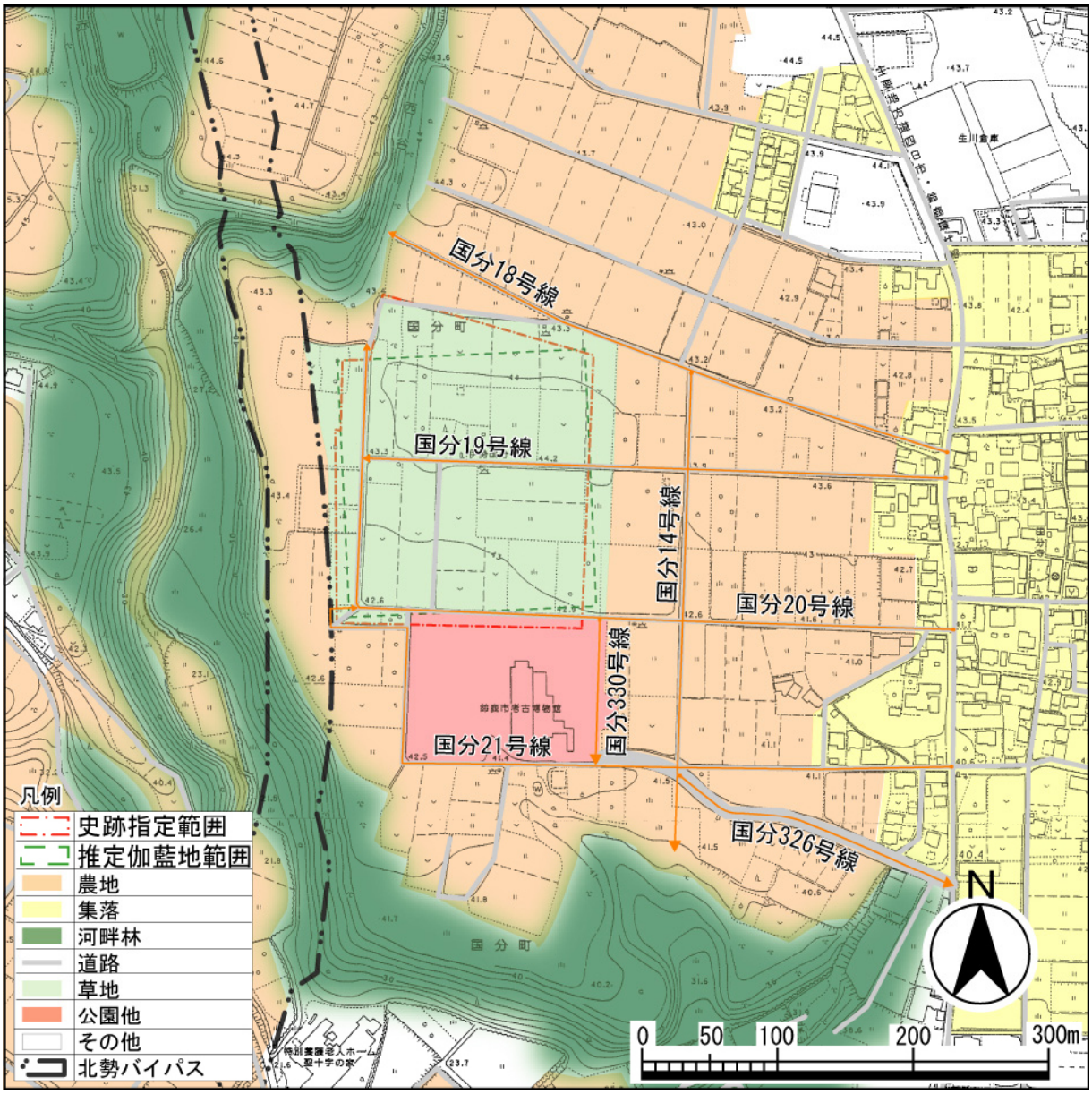
(3) 土地利用

史跡伊勢国分寺跡周辺は、国分町をはじめ、木田町、山辺町の既存集落や、高岡町の住宅団地等が立地し、その周辺には、畑や水田等の農地、台地先端部に複雑に入り込んだ谷やその斜面に連なる河畔林等が見られる。総じて低密度の土地利用である。こうした中で、東部の高岡町では高岡山土地区画整理事業により、まとまった住宅地が形成されている。

史跡指定地は、37,180㎡（実測39,880㎡）の面積があり、ほぼ台形状を呈している。指定地の中央部には講堂跡である土壇状の高まりが残っている。ここには石碑が建てられ、これを取り囲むように杉等の樹木が数本みられる。これ以外の指定地内は、概ね草地となっており、指定地内を東西に２本、南北に１本の市道国分19・20号線が整備されている。

史跡周辺の現況土地利用は、柿等の果樹や野菜の栽培等を中心とする畑が広がり、一部に稲作が見られる農地である。

指定地の西側には浪瀬川の支流が南流しており、この右岸側及び南側の斜面には竹や杉等の河畔林が連続しており、また、南側には鈴鹿市考古博物館が立地している。



現況土地利用図

(4) 指定状況

名　　称：伊勢国分寺跡

種　　類：国指定史跡

（３）社寺の跡又は旧境内、経塚、磨崖仏その他祭祀信仰に関する遺跡

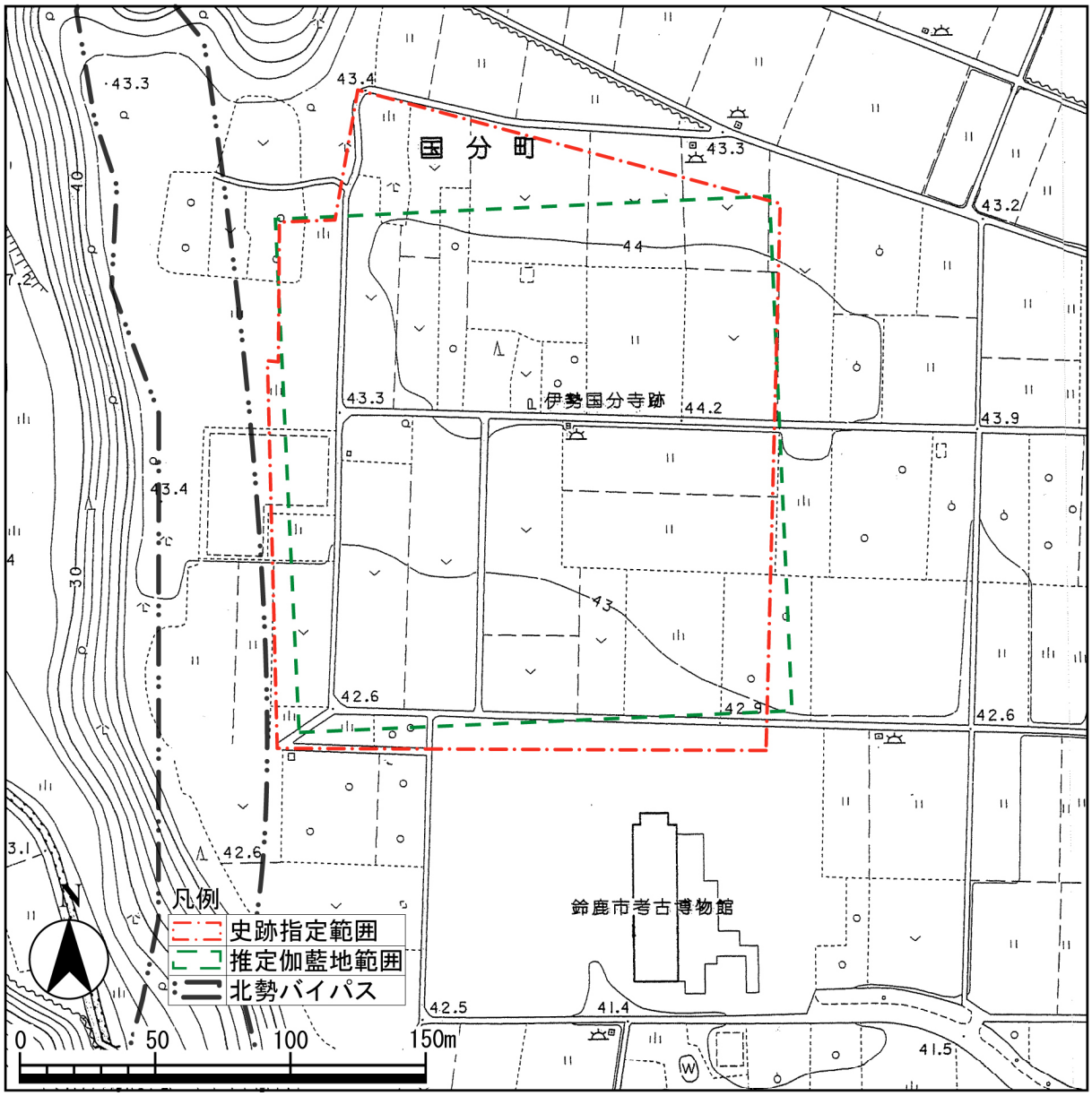
指 定 日：大正11年10月12日

所 在 地：三重県鈴鹿市国分町字西高木他

指定面積：37,180㎡（実測39,880㎡）

指定理由：古代伊勢国の国分寺跡で築地跡や堂跡と呼ばれる土壇状の高まりが残り、保存状態が良好

管理団体：鈴鹿市



伊勢国分寺史跡指定範囲及び推定伽藍地範囲図

(5) 伊勢国分寺の沿革と史跡指定の経緯

伊勢国分寺跡は鈴鹿川左岸の台地上にあって、谷に面した台地の西端部寄りにある。伊勢国分寺跡が当地にあることは古くから知られており、江戸時代の資料『東海道名所図絵』や『三国地誌』にも礎石が散在している様子が記されている。

伊勢国分寺がいつ造営されたのかは文献等からは明らかではないが、全国の国分寺が地方豪族の財力の援助により造営されてきたように、伊勢国分寺も河曲郡一帯を治めていた郡司級の豪族である伊勢大鹿氏の強い影響があったのではないかといわれている。

また、この一帯が『延喜式』に見る東海道河曲駅家の推定地とされてきたところから、こうした交通・地理的条件が寺地の選定理由の一つとも考えられている。

伊勢国分寺跡は、残存していた土塁（築地）や瓦の散布範囲により、全国でも比較的早い時期の大正11年（1922）に面積37,180㎡の範囲が指定を受け、昭和63年度からの確認調査により伽藍地（寺域）が明らかになった。

今も伊勢国分寺跡の中央やや西寄りには、東西約20m、南北約30mにわたって、高さ約0.5mの土壇状の高まりが森として残り、付近から掘り出された礎石が集められている。また、土壇周辺から瓦や塼等が多数出土している。地域の人々はここを堂跡と呼んでおり、講堂跡か金堂跡であろうと考えられていたが、近年の発掘調査により、この土壇状の高まりはおおよそ講堂基壇の東側半分の痕跡であることが分かっている。なお、指定当時は史跡の西側境界付近に南北に延びる築地の痕跡が残っていたと伝えられるが、その後の開墾により現在は消滅している。

(6) 発掘調査等の経緯

伊勢国分寺跡は大正11年に国の史跡指定を受けた後も畑地を中心とした農地として利用されてきた。しかし、戦後は農地の改良に伴い、畑地から水田への転換と、農耕機械による深耕により史跡の荒廃が進んだ。地域の人たちに堂跡と呼ばれていた土壇周辺から瓦や塼等が多数出土していたにもかかわらず発掘調査等は行われず、遺跡全体の把握はなされていないままであった。

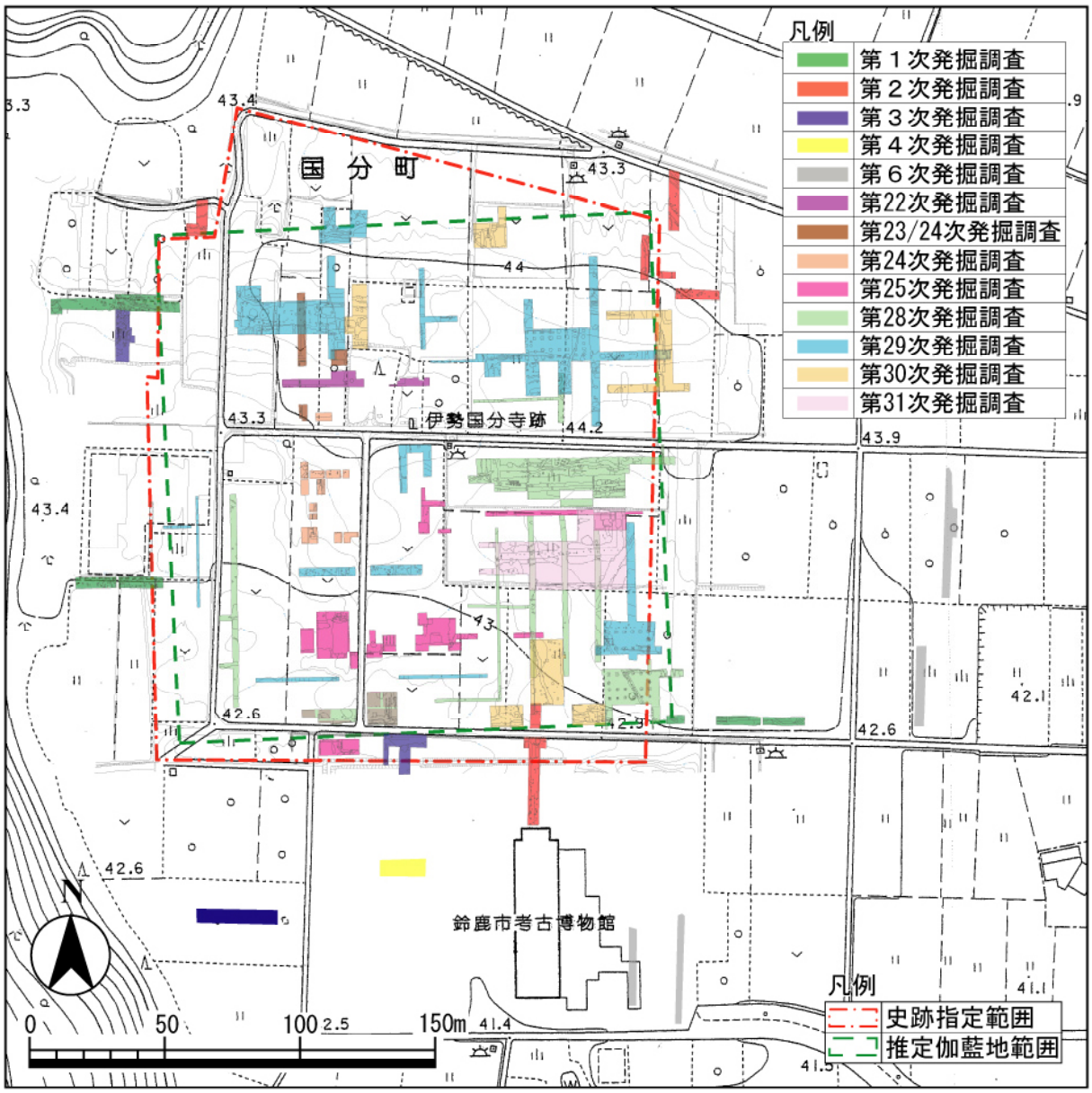
特に、昭和60年代に入り、史跡伊勢国分寺跡周辺において北勢バイパス計画や住宅、道路等各種の開発が増加するとともに、「鈴鹿市北部地域開発整備構想（レインボウ・ヒルズ計画）」や「鈴鹿市博物館建設懇話会」の提言等により、国分寺跡に対する保存と活用への気運が高まってきた。鈴鹿市は、昭和63年度から国・県の補助を受け、遺跡の範囲確認のための発掘調査に着手した。

計画的な発掘調査により、伽藍地も明らかになり、史跡範囲内にほぼ収まっていることが確認された。発掘調査を受け、地元住民から史跡整備に向けた史跡の公有地化への要望も高まった。文化庁並びに三重県の補助を得ながら継続的に公有地化を進めるにあたり、将来の整備構想を明

らかにする必要があり、平成４年度には史跡伊勢国分寺跡及び周辺の環境整備に係る基本構想が策定され、保存並びに活用整備の基本的方針が示された。これを受け、平成７年度から用地の公有化が開始され、整備対象範囲の用地の公有化は平成９年度に完了した。その後、史跡指定地南側には鈴鹿市考古博物館（平成10年度開館）が建設された。

さらに、平成11年度からは、史跡指定地の保存活用整備に向けて発掘調査が開始され、翌平成12年度には市の史跡整備構想を明確化するため「史跡伊勢国分寺跡及び周辺整備基本計画」を策定した。

発掘調査は、その後、平成17年度まで実施し、主要伽藍の位置・規模が明らかにされた。ほぼ、整備に向けた条件が整ってきたが、平成12年度に策定された基本計画には、調査によって確認された伽藍配置に基づく整備計画や史跡の幅広い活用計画が盛り込まれていないことから、今年度は「国史跡伊勢国分寺跡保存整備検討委員会」の意見を聞きながら、改訂を進め、新たな基本計画を策定した。



発掘調査位置図

伊勢国分寺跡の調査履歴

年　　度	内　　容	発掘調査報告書
大正11(1922)年度	面積37,180㎡の範囲が国史跡指定地となる。	
昭和63(1988)年度	伽藍地の範囲確認調査の発掘調査（第１次）開始。トレンチ調査４か所。	
平成元(1989)年度	第２次発掘調査。トレンチ調査７か所。 第１次、第２次発掘調査により約180m四方の伽藍地の範囲を確認する。(史跡指定地内に含まれる)	伊勢国分寺跡調査概要
平成２(1990)年度	第３次発掘調査。伽藍地周辺のトレンチ調査４か所（１か所は尼寺推定地)。 数棟の建物跡等のほか南門跡を確認する。	伊勢国分寺跡－第３次発掘調査概要報告－
平成３(1991)年度	第４次発掘調査。史跡指定地外南側トレンチ調査１か所。 ピットを多数検出するにとどまる。	伊勢国分寺跡－尼寺跡推定地の調査－
平成４(1992)年度	基本構想の策定。 第５次発掘調査。国分寺跡に直接関連する遺構は発見されず。	伊勢国分寺跡(５次)長者屋敷遺跡(１次)
平成５(1993)年度	第６次発掘調査。史跡指定地外トレンチ調査４か所。 国分寺跡関連遺構は確認できない。	伊勢国分寺・国府跡－長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業概要報告－
平成７(1995)年度 ～ 平成９(1997)年度	用地の公有化。	
平成10(1998)年度	鈴鹿市考古博物館開館（史跡指定地南側隣接地)。	
平成11(1999)年度	第22・23次発掘調査。史跡指定地内講堂推定地。 講堂基壇の東西規模（約33m）を確認する。	伊勢国分寺跡１
平成12(2000)年度	第24次発掘調査。講堂跡・金堂跡推定地。 講堂基壇の南北規模（約21m）を確認する。また、金堂基壇規模についても東西約30.5m、南北約21.9mと確認する。 基本計画を策定。	伊勢国分寺跡１
平成13(2001)年度	第25次発掘調査。中門跡・回廊跡・塔跡・南門跡推定地。 中門基壇の規模（東西約19.5m、南北約12m）を確認する。 回廊規模（東西約68m、南北約51m、幅約７m）を確認する。 塔跡については確認できない。また、南門跡の調査は次年度に繰り越される。	伊勢国分寺跡２－第25次発掘調査概要報告－
平成14(2002)年度	第28次発掘調査。南門跡・塔跡推定地。 南門基壇の規模（東西17.6m、南北11.2m）を確認。 塔跡については確認できない。 伽藍地内に築地で区画された院の存在を確認する。また、伽藍地内南東隅から大型掘立柱建物を確認する。	伊勢国分寺跡３
平成15(2003)年度	第29次発掘調査。僧坊跡・鐘楼跡・北門跡推定地。 僧坊規模は東西72m、南北９mと推定される。 食堂跡と思われる大型の掘立柱建物跡を確認したほか、昨年度に続き伽藍地内南東隅から掘立柱建物を確認する。鐘楼跡と塔跡については確認できない。	伊勢国分寺跡４
平成16(2004)年度	第30次発掘調査。塔跡・僧坊跡推定地。 僧坊基壇の規模（東西72m、南北９m）を確認する。 伽藍地内を区画する築地の接点を確認する。塔跡については確認できない。	伊勢国分寺跡５
平成17(2005)年度	第31次発掘調査。塔推定地。 伽藍地内を区画する築地とそれに付属する門を確認する。 塔跡についてはそれらしい遺構を確認できない。	伊勢国分寺跡６

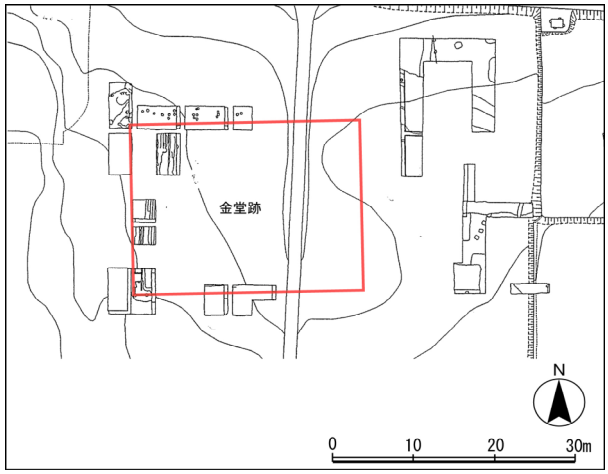
(7) 遺構の概要

これまでの計画的な発掘調査により、金堂、講堂等の主要建物の位置や平面的な規模がほぼ明らかになっている。

ここでは、主要建物の概要について整理しておく。

●金堂跡（第24次　2000年　参考文献：新田剛2002『伊勢国分寺跡１』鈴鹿市教育委員会）

調査は講堂基壇から想定される伽藍中軸線を基に、西北・西南隅を求めて試掘坑を設定し実施した。後世の耕作によって、国分寺の時代の地表面よりわずかに下面まで削平され、講堂より残りは悪い。掘込地業と、掘込地業を上面から掘り込み配置された塼列が検出された。前者を創建期の基壇に伴うもの、後者の塼列を地覆とみて想定される基壇を再築された第二期の基壇と考えている。基壇化粧は塼積み又は瓦・塼積みであったと推定される。掘込地業は0.7～0.8m掘り込まれ整然とした版築がなされている。想定中軸線から掘込地業の西辺までの距離を、東へ折り返し復元された創建期基壇の規模は東西30.5m×南北21.9mである。柱位置を示す遺構は存在しないが、基壇の平面形は講堂と比較して東西がかなり短く、桁行７間×梁行４間の柱配置を想定するより、桁行５間×梁行４間の柱配置がうまくおさまるようにも見え、古い建築様式の伽藍であった可能性も指摘されている。階段の痕跡は確実に存在したであろう中軸線上においても全く痕跡を見出だせなかった。ただし、第二期基壇の西辺に取り付くように配された東西方向の塼列が確認され、回廊との接続部と見ることができる。講堂と同様に基壇の外周に瓦・塼を大量に含んだ溝が巡る。

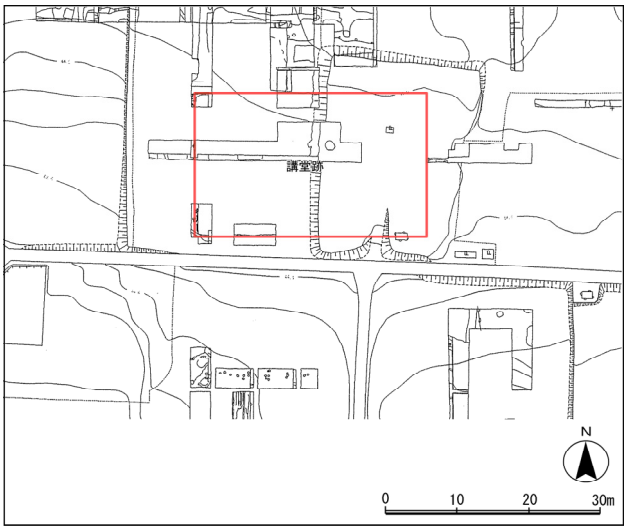


金堂跡遺構図

●講堂跡（第22･23次　1999年、第24次　2000年　参考文献：新田剛2002『伊勢国分寺跡１』鈴鹿市教育委員会）

史跡の中央部に基壇状の高まりとして残り、礎石らしき石が点在して、基壇遺存の可能性が最も高いと考えられていた。第22次調査で東西トレンチを設定し基壇の位置と東西規模を明らかにし、第23･24次調査において西辺及び西北・西南隅で基壇ラインの検出を試みた。当初、基壇と考えていた高まりは、大部分後世の盛土であり基壇の位置も大きく西にずれていることが確認された。基壇は、北辺では8個の塼が東西に並び、西・南辺では瓦・塼からなる列が確認され、基壇化粧の最下壇の地覆と見られる。よって基壇化粧は塼積か、瓦塼を併用したものと推測される。北辺では塼列の前面に軒先瓦がそのまま落下した状態で出土し、屋根景観を復元する良好な資料が得られた。基壇の掘込地業は、最深部で0.6mほど掘り込まれ版築で築造されている。それ以上の地上部はほぼ削平され失われており、基壇化粧の上部構造、柱位置を示す礎石据付穴･抜取痕等の遺構は検出できなかった。基壇の地覆の瓦・塼列、掘込地業から講堂の規模は東西33m×南北21mと復元された。おそらく桁行７間×梁行４間の建物が建てられていたと想定できる。西辺地覆の瓦・塼列から、建物の主軸がN1.7°Wであることも判明した。

基壇の周囲には大量の瓦塼を含む深さ１m、幅３m以上になる大溝が巡らされている。溝は建物が機能していた時期には埋め戻されており、築造時の採土・改築等の際に廃材処理のために掘られたものと見られる。

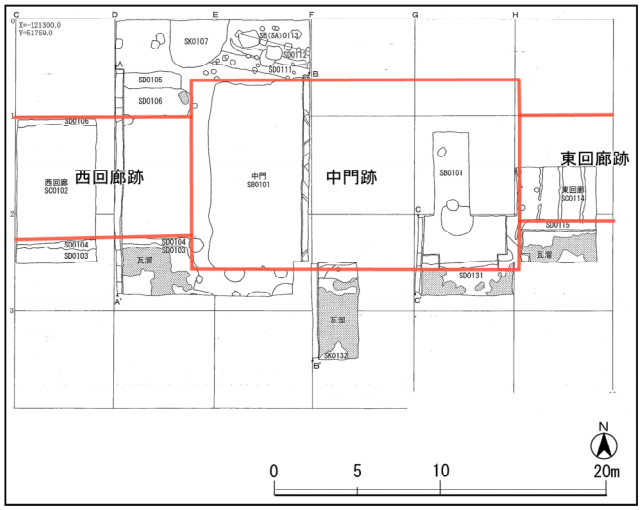


講堂跡遺構図

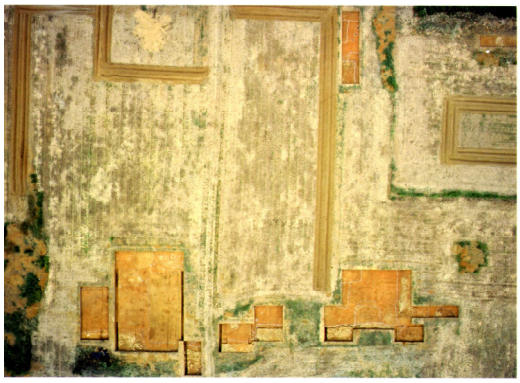
第23次調査（講堂基壇）

●中門跡（第25次　2001年　参考文献：藤原秀樹・林和範2002『伊勢国分寺跡２』鈴鹿市教育委員会）

遺構は後世の耕作等により、旧地表からかなり深くまで削平を受けている。かろうじて基壇掘込地業の最下層が残っていた。地業の残存深さは最大で0.2m、西辺では失われている状態であった。南面には瓦を大量に含んだ溝が見られるが、北面には無い。柱位置を示す礎石抜取痕等の遺構・階段・足場穴等の痕跡は残っていない。基壇の東西辺には回廊の基壇が取り付くが、これは完全に削平され、内外周溝によって推定されるのみである。中門基壇の規模は、東西は回廊外周溝の端々の距離をもとに、南北は掘り込み地業の範囲から、東西19.5m×南北11.9mと推定している。



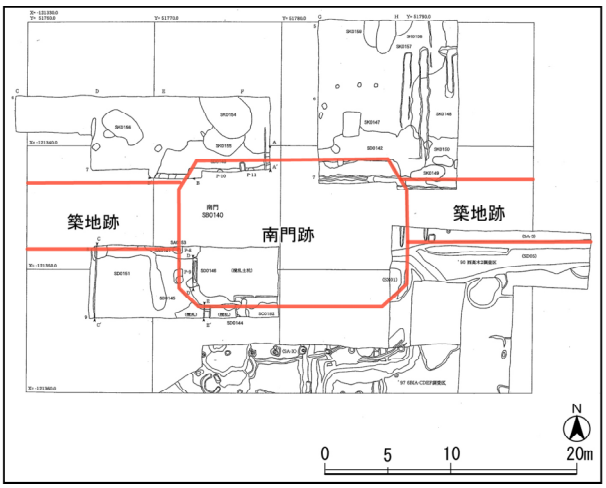
中門跡遺構図


第25次調査（中門・回廊）

●南門跡（第25次　2001年、第28次　2002年　参考文献：藤原秀樹・林和範2003『伊勢国分寺跡３』鈴鹿市教育委員会）

遺構は著しく削平されており、基壇の掘込地業すら残存していなかった。内外周溝から推定される基壇は、長方形の各隅を切り落とした様な扁平な八角形状の形態で東西17.6m×南北11.2mと復元される。この溝によって復元された形態が上部の構造にどのように影響していたかは不明である。礎石抜取痕等の遺構・階段・足場穴等の痕跡は残っていない。しかし、外周の溝は南面

中央で途切れ幅７ｍの陸橋状をなし、対応する内周溝も北面中央部で東西7mにわたり幅が狭くなる。このことから南門に取り付く幅７ｍほどの道路の存在が想定される。また、南門前面には目隠し塀状の掘立柱列も確認されている。改修等の際に設けられたものであろう。

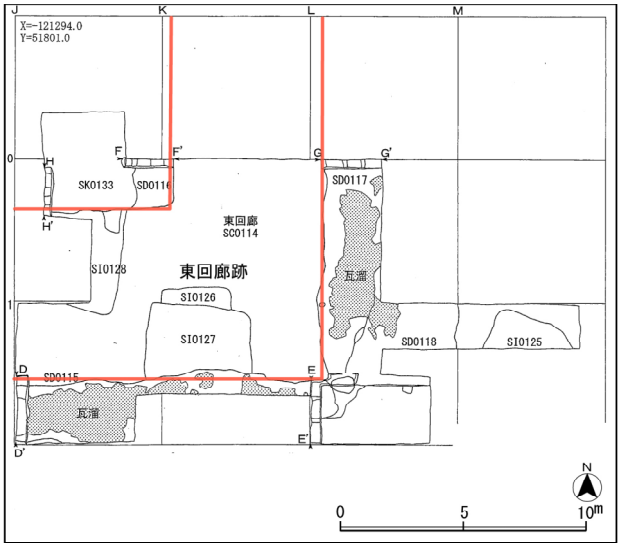


南門跡遺構図

第28次調査（南門）

●回廊跡（第25次　2001年　参考文献：藤原秀樹・林和範2002『伊勢国分寺跡２』鈴鹿市教育委員会）

中門の東西への取り付き部分で検出されたほか、東南隅、東北隅を確認するために、中門と金堂の東方に調査区を設けて確認を行った。基壇は全く削平されているため、内外周溝から復元している。南辺回廊が幅7.2m・東辺回廊が６ｍ、北辺回廊が6.8mと復元される。当然、柱抜取痕等は検出されないので柱位置は不明であり、単廊・複廊かについても断定はできない。内外周溝は深さ1m、幅2.5m以上あり瓦を大量に含む。このような大規模な空堀状の溝が回廊内外を巡ることは想定しがたいので、最上層が雨落ち溝として利用されていた可能性は捨てがたいが、発掘調査で確認された中下層部は、他の基壇同様採土、改築時の廃材処理のために掘られた溝であろう。東回廊の規模が判明し、推定中軸線をもとに西へ折り返して復元した規模は、辺々で東西68m×南北51mである。中門と金堂を結んで金堂院を構成していた。



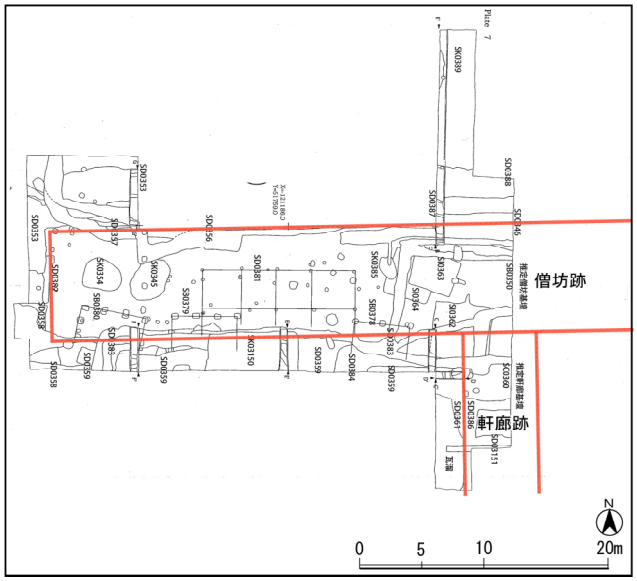
回廊跡遺構図

●僧坊跡（第29次　2003年・第30次　2004年　参考文献：藤原秀樹2004『伊勢国分寺跡４』鈴鹿市教育委員会、伊藤淳2005『伊勢国分寺跡５』鈴鹿市考古博物館）

基壇は全く削平され、全面で掘込地業さえ失われている。基壇が存在したであろう範囲には中世以降の撹乱が比較的少なく、これによって面として僧坊基壇の範囲が認識可能であるが、基壇ラインを求める根拠となる遺構には乏しい。他の基壇建物の外周に見られるような溝も、中世以降に掘られた溝や土坑が複雑に重複していて、断片的に確認できるのみである。特に南辺につい

てはほとんど根拠となる遺構は無い。伽藍中軸線から西に36mの地点に痕跡的ながら南北溝がありこれを西辺と考え、東辺についても伽藍中軸線からおよそ36mの地点に中世以降の溝に切られているものの対応して南北溝があることから、東西72m×南北9mの長大な基壇を想定している。当然、柱抜取痕等は検出出来ないため柱位置は不明である。

講堂・僧坊間のトレンチにおいて伽藍中軸線から西に３mばかり離れて雨落ち状の南北溝が検出された。この溝の東肩は直線的で、東側には撹乱を受けていないピュアな面が見られた。これを軒廊の基壇と見ている。当然、柱抜取痕等は検出出来ないため柱位置等は不明である。幅６m×延長18mの規模で講堂・僧坊を結んでいたと推定される。

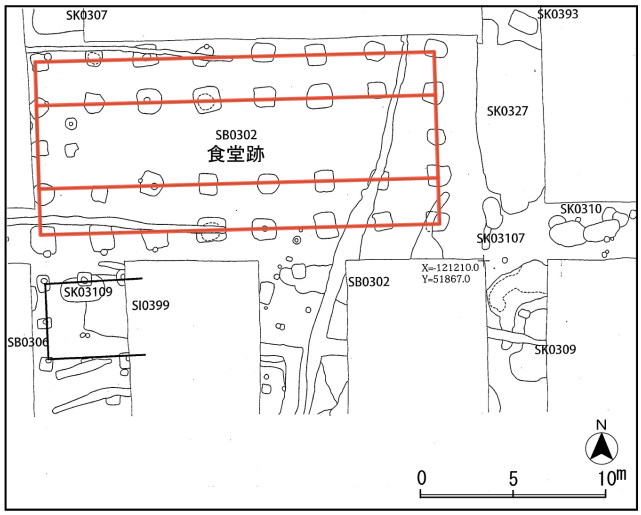


僧坊跡遺構図

第29次調査（僧坊）

●推定食堂跡（第29次　2003年　参考文献：藤原秀樹2004『伊勢国分寺跡４』鈴鹿市教育委員会）

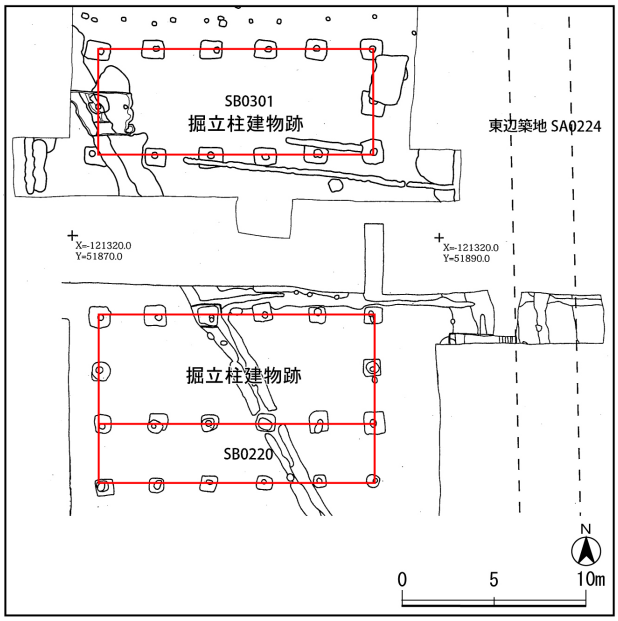
伽藍地の東北には築地塀で区画された東西94m×南北90mの院が所在する。その中央部に桁行７間×梁行２間で、南北両面に廂を持つ大型の建物である。柱間は桁行き３m、梁行き2.4m、廂の出が2.4mである。柱の掘方には一辺１mを超えるものも見られるが、検出面からの深さはわずかで、柱痕は確認できなかった。礎石据付穴あるいは壺地業の最下部が残ったものである可能性も否定できないが、礎石建ち建物である積極的な根拠も無い。掘方の形状や並びもそれほど厳密ではない。周囲には廃棄土坑と見られる土坑が密集している。土坑からは焼土・炭のほか土師器甕や須恵器坏等の煮炊具・食膳具がまとまって出土したほか、製塩土器も出土した。この点から食堂あるいは大炊院の中心的建物といった給食施設の可能性を考えている。



食堂跡遺構図

●掘立柱建物跡（第28次　2002年、29次　2003年　参考文献：藤原秀樹2003『伊勢国分寺跡３』鈴鹿市教育委員会、藤原秀樹2004『伊勢国分寺跡４』鈴鹿市教育委員会）

伽藍地東南部から南北に並列２棟の東西棟の掘立柱建物跡が検出された。南方の建物は桁行５間×梁行２間で南面に廂を有する建物で、柱間は桁行・梁行とも３ｍで、廂の出は3.3mである。北方の建物も南方の建物は桁行５間×梁行２間で、柱間は桁行・梁行とも３ｍである。両建物は９ｍ（30尺）という距離を置いて、両妻の柱筋をそろえて立てられていて、ほぼ同時期に計画的に建てられたものと見られる。柱掘方には瓦を含まず、柱痕には瓦片を含んでいることから、国分寺創建期に建てられ、新たに建て替えられることなく廃絶したものと見られる。役割についてはさまざまな案が提示されているが、確証付ける遺物は出土していない。



掘立柱建物跡遺構図

●築地塀と院（第１～３次、1988～1990年　28次～31次　参考文献：新田剛・藤原秀樹1989『伊勢国分寺跡調査概要』鈴鹿市教育委員会、浅尾悟1990『伊勢国分寺跡第３次発掘調査概要報告』鈴鹿市教育委員会、藤原秀樹2003『伊勢国分寺跡３』鈴鹿市教育委員会、藤原秀樹2004『伊勢国分寺跡４』鈴鹿市教育委員会、伊藤淳2005『伊勢国分寺跡５』鈴鹿市考古博物館、伊藤淳2006『伊勢国分寺跡６』鈴鹿市考古博物館）

第１～３次調査では、伽藍地西北隅・東北隅・西辺２か所・東南隅・南辺２か所の７か所14トレンチを設けて確認調査を行った。その結果伽藍地の全周を築地塀が巡っており、その規模は東西180m（600尺）×南北180mの正方形であることが確認された。ただし、築地基壇は基底部まで削平を受けており、内外周の溝によってその存在を確認するにとどまっている。基底部の幅はおよそ３ｍである。

北辺築地の伽藍中軸線に当たる部分では、内外周溝が７ｍにわたって途切れここに礎石建ちの北門が存在した可能性が高いと考えているが、基壇規模・柱配置を示すような遺構は失われている。

第28次調査以降の伽藍地東部の調査において、築地塀で区画された東西64m×南北90mの院が確認された。当然この築地基壇も基底部まで削平を受けており、内外周の溝によってその存在を確認するにとどまっている。基底部幅は2.4mである。この院の西面ほぼ中央では、内外周溝が途切れ、２本の掘立柱からなる棟門が確認されている。柱間は３ｍである。南面についても、５ｍほど内外周溝が途切れた部分がありここにも小規模ながら礎石建ちの門が存在した可能性が高い。

31次調査では、さらに北東院の南に付属するように東西45m×南北30mの築地塀で区画された小院が確認された。この築地の基壇は基底部まで削平を受けており、内外周の溝によってその存在を確認するにとどまっている。この小院も南辺中央に幅３ｍの掘立柱の棟門が確認されている。

●国分寺跡伽藍遺構の特色と残された課題

・伽藍地の全周を築地塀が巡っており、その規模は東西180m（600尺）×南北180mの正方形であることが確認された。

・伽藍中軸線は伽藍地の西寄り1/3に、南門・中門・金堂・講堂・僧坊と一直線に主要伽藍が並んでいる。

・金堂の基壇と講堂の基壇の平面形には大きな差があり、建物の構造も異なったものであった可能性が高い。

・伽藍地内の東部に、築地塀で区画された大小の院が存在することが確認された。塔院を除き他国の国分寺にほとんど例のない遺構である。

・伽藍地内南東隅の並列した掘立柱建物もあまり類例が見られない。

・塔・鐘楼・経蔵の位置が未確認である。

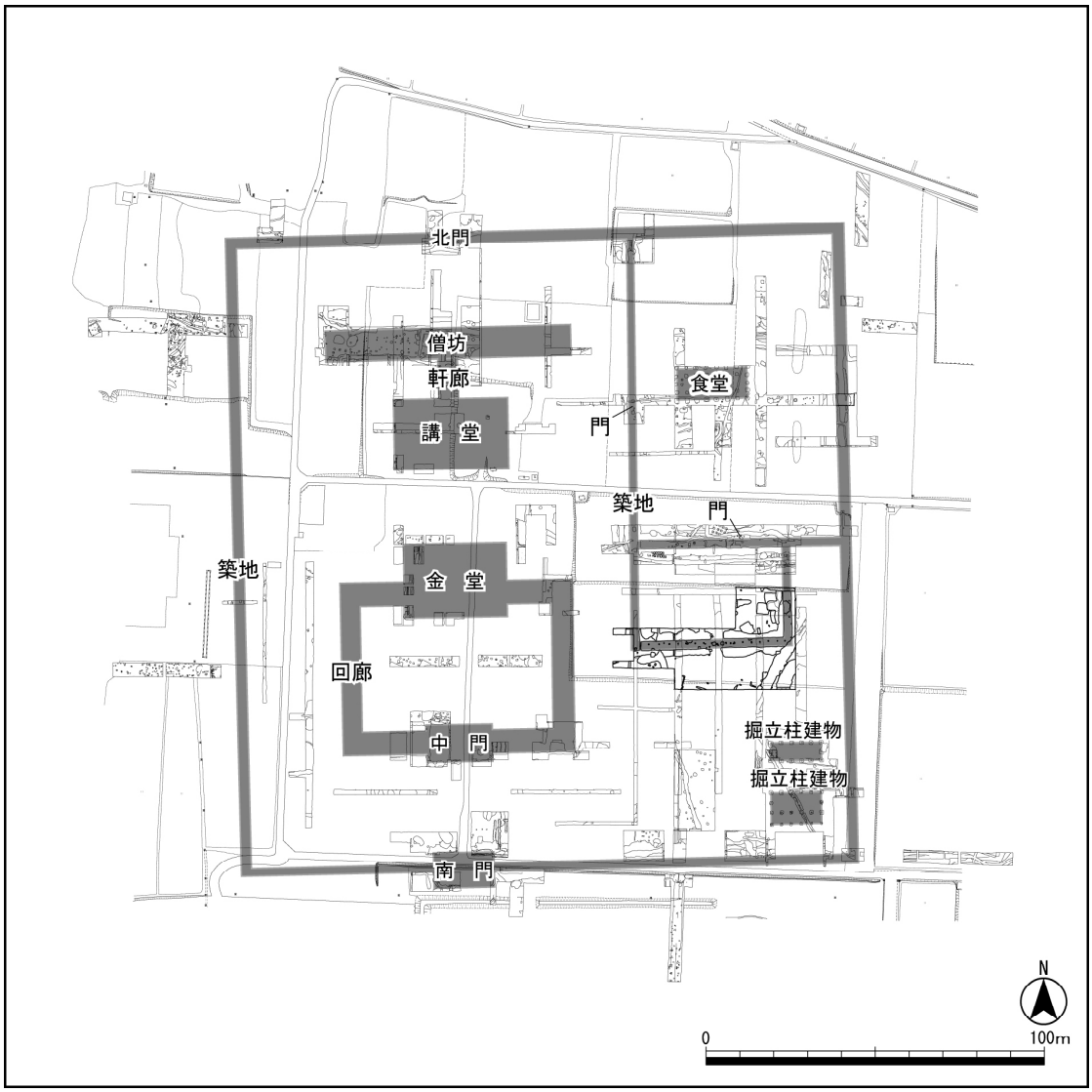
・外周築地の四隅のコーナーを押さえた調査が未実施である。

・東西の門が未確認である。

・大小院の内部構造と性格を明らかにする調査も不十分である。

・伽藍地外（周辺地帯）の関連遺構の広がりについてもまだ十分に把握されていない。

・南門正面の道路、僧寺と尼寺を結ぶ道路、古代官道との関連なども検討を要する。



伽藍配置図

(8) 史跡伊勢国分寺跡に対する市民意向

市民の国分寺整備と歴史公園に対する意識と、地元である国分町の意向を把握するために、アンケート等の結果や意見をまとめた。

① 鈴鹿市政メールモニターによる調査（資料(4)参照）

鈴鹿市政メールモニター（メルモニ）制度を使い、平成18年9月4日～10日の期間で実施した。アンケートの配信者数は4611人で、回答者数 1464人（回答率 31.8%）であった。

●史跡等の認知度

史跡伊勢国分寺跡については、「知っているし、行ったことがある」が13.8%、「知っているが、行ったことはない」が43.6%、「知らない」が42.6%であった。また、鈴鹿市考古博物館については、「知っているし、行ったことがある」が37.8%、「知っているが、行ったことはない」が49.6%、「知らない」が12.6%であった。

鈴鹿市考古博物館は、史跡伊勢国分寺跡に隣接して設置されているにもかかわらず、史跡についての認知度が低いという結果となった。

●史跡伊勢国分寺跡の整備に希望すること

史跡の整備でどのような施設であることを希望するかについて3つまでの複数回答で聞いたところ、「建物など当時の様子を見ることができる」が68.5%で最も多く、次いで「学習することができる」が49.2%、「季節の花を楽しむことができる」が35.9%、「子どもを遊ばせることができる」が35.4%の順であった。また、「何もせず原っぱのままがよい」は7.2%であった。

歴史や文化を学ぶことができる場としてや、いこいの広場となるような整備を希望する意見が多いという結果となり、何もしないという意見は少数であった。

●自由記述からの抜粋

- 子供を気軽に連れて行ける公園が出来るといいな…と思います。(39歳女性)
- この類の旧所名跡はどこも思い入れが勝ちすぎて立派な建物など金をかけてもほんの一部の人と一時だけの慰みで終わり後は閑散と人も寄り付かない施設となりがち。それよりも皆が楽しめる公園の中で自然に歴史の学習できることが好ましい。(63歳男性)
- せっかく作るのであれば、市民が集える場所になって欲しい。作っても人が集まらず寂しい場所であったり、また整備が行き届かず荒れ放題の場所になっては税金の無駄使いです。(29歳女性)
- 歴史を伝えるものはできる限り現状の保存に努めるべきです。俗化するのは良くないと思いますが、ただ取り付きにくくなるのも良くなく扱いが難しいです。(35歳男性)
- 修学旅行ですら遊園地を選ぶ時代に、ありきたりで、保存しただけの場所へ足を運ぶ人は減る一方だと思う。楽しめるスペース作りと、少しの学習で歴史を身近に感じさせてくれればと思います。あまり興味がない層を呼び寄せる仕掛けは必要でしょう。(35歳女性)
- 考古博物館は好きで何度か行ったことがあります。公園が整備され、もっと内容の充実した施設になることを望みます。(37歳女性)

・ 建物の規模が分かる敷石や芝生張り程度の整備は必要かと思うが 過大な整備費や維持管理費がかかるものは不要と考える。学習や建物の概要については，考古博物館の施設を利用することを考えるべきである。(53歳男性)
・ まず、たくさんの人に知って頂くようにイベントを打ち、親しまれることが大事。(56歳男性)
・ 国道1号やJRにも近く、交通の便利なところなので今後、まだ発展の余地がある、と思います。市民の憩いの場所としての整備を、お願いします。(76歳男性)
・ 子どもの学習や体験・体感、大人の生涯学習や興味を満たす場であって欲しいと思います。食事については、弁当がとれるベンチなどがあれば十分でしょう。(51歳男性)
・ 無理して若者に合わせなくてもよいので、のんびりと歴史を感じられる空間にして欲しいものです。もちろん、ユニバーサルデザインで。お金もかからず、派手なイベントもなくてもいいと思います。(34歳女性)
・ ボランティアの説明が四六時中あったらいいと思う。(58歳男性)
・ ただの公園ではなく歴史を学べる場所にしてほしい。(18歳女性)
・ 考古博物館では、昨年と今年の夏休みに親子で楽しい体験をさせて頂きました。伊勢国分寺跡の整備では、昔何があったか分かりやすく学べたり年齢問わず楽しめる場を作って欲しいですね。(36歳女性)
・ 夏休みに子供と一緒に博物館に行き、子供が勾玉作りを体験している間に展示を見て回りましたが、鈴鹿市にはこんなにたくさん遺跡があるのかと驚いたのと、少し物足りなさを感じ、もっと見てみたいと思いました。子供もまた行きたいと言ってましたし、親子で楽しみながら学習もできるような公園になればいいですね。(44歳女性)

② 地元の意向

地元である国分町を対象に、平成18年9月22日（金）の19時から鈴鹿市考古博物館で、史跡伊勢国分寺跡のこれまでの調査成果のスライド説明とともに、今後の史跡伊勢国分寺跡の整備についての意見交換を実施し、40人の町民の参加を得た。史跡整備に関する主な意見は以下のとおりである。

・ 多くの方に来てもらえるようにしてもらいたい。
・ 歴史公園の整備はお金も時間もかかるだろうが進めて欲しい。
・ 開館以来，地元の人もほとんど来ていないので地元の人も足を運べる施設にしてほしい。
・ 用地を買収してからやっと発掘調査が終了したが，もっと早く整備してほしい。いつまでも時間がかかりすぎである。
・ 博物館が中心になって国分寺跡の調査成果等を収蔵し，地元と一緒になって整備を進めて欲しい。
・ 考古博物館を中心に周辺の古墳や遺跡，東海道等を利用した歴史の道や散策の紹介をしてはどうか。
・ 今もそうであるが，博物館に来る道が分かりにくいので道を整備することも含めて分かりやすく来てもらえるようにしてもらいたい。

(9) 史跡伊勢国分寺跡の特徴

これまでの分析結果から史跡伊勢国分寺跡及び周辺の特徴は以下のように集約できる。

＜遺構＞

●伽藍地を区画する築地塀の跡と伽藍配置及び基壇の規模等についてはほぼ把握されている。

●伽藍地内における大・小院の存在や掘立柱建物等、主要伽藍以外の遺構が、これほど明確になっている例は少なく、全国的にも貴重な事例である。

●後世の耕作等によって、遺構の上部が失われ、主要建物の柱位置等については不明なところが多い。

●現在のところ塔跡の存在が確認されていないため、僧寺であると断定するに至っていない。

＜立地環境等＞

●史跡指定地の周辺を含む約6.5haの土地が公有化されている。

●寺域のほぼ全域が国の史跡に指定され、保護の対象となっている。

＜周辺環境＞

●現在、史跡指定地は概ね草地となっており周辺も草地や農地として利用されている。視界を遮る構造物等がほとんどなく、また、史跡指定地内には大きな道路等も無いことから往時の景観を思い起こさせる環境が良好に保たれている。

●周辺には大鹿廃寺や富士山古墳群、寺田山古墳群、菅原神社等、緑や森と一体化をなした文化財が多数点在している。

●住宅地と適当な距離にあるため、地域住民の散歩コース等に利用され、親しまれている。

●国道１号から近いこともあり広域のアクセスは良好である。

●北勢バイパスが史跡指定地の西をかすめるように計画されている。

●市街地からは比較的遠く、直接乗り入れる公共交通機関がないために鈴鹿市内からのアクセスはやや不便である。

●史跡指定地に隣接して、史跡伊勢国分寺跡のガイダンス機能を兼ねた鈴鹿市考古博物館が建設されている。博物館では伊勢国分寺跡をはじめとする市内の遺跡からの出土品に関する展示と歴史体験学習や講座が充実している。

●鈴鹿市考古博物館３階の展望デッキから史跡伊勢国分寺跡の全体を一望することができる。

●鈴鹿市考古博物館の周辺には既に大型車用を含む駐車場等が整備されている。